

Title	眞野古墳群調査概報
Sub Title	Report on the excavation of the ancient tombs at Mano, Fukushima prefecture
Author	藤田, 亮策(Fujita, Ryosaku)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.3 (1948. 11) ,p.53(313)- 75(335)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯古代日本研究
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19481100-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

眞野古墳群調査概報

藤 田 亮 策

一 眞野古墳群

福島縣相馬郡眞野村字寺内井に上眞野村字小池原に跨る古墳群は、早く學界に紹介されて最も興味ある遺蹟であり、地域一帯が眞野長者傳説によつて近世の物語に彩られて居るので、眞野古墳群と總稱することとした。

磐城國內に於ける古墳は郡山・福島を結ぶ陸奥街道に沿うたものと海岸に近い濱街道沿線のものがあり、その數は決して少くない。海岸線にあつては平・原町・眞野・日田木・中村を中心とした土地に群在し、何れも豐饒な平野を控へ大聚落附近にあつて、上代の適住地が今日と異ならぬことを示して居る。眞野の古墳は鹿島町の西約一軒半乃至二軒にあり、眞野川の沖積低地に臨む洪積層の臺地上にある。眞野村字寺内から上眞野村字小池原ま

で約三軒は高低の少ない極めて緩傾斜の平臺で、最近まで大半針葉樹林に被はれ一部開墾されて居た。いま鹿島からこの臺地の中央を東西に走る直線道路が通じ遠く伊達郡川俣方面に達して居る。古墳の一群は臺地の登口に近い寺内の男山八幡宮から西の方小字八幡林、同大谷地に散點して直線道路の左右に跨がつて居る。これを寺内古墳群といひ七十五基の所在が數へ得られたが、その内約二十基は痕迹によつて知ることが出来たもので、封土の大半を失ひ或は全く封土なくして棺槨のみが探り得られたものである。曾てはなほ十數基の古墳のあつたことが察知出来るが、數度の開拓によつて失はれ、又住家の敷地となつてしまつた。寺内古墳群から西半軒を隔てて字小池原の内、字新田原に近い西端隅に約二十基が連綴し、これを小池原古墳群といふ。眞野古墳とは以上寺

内・小池原兩古墳群を合せて名づけたもので、一地點に九十五基の古墳の群集は、磐城國內にては類例少なく東北六縣の間にも重要な位置を占めるといへる。而かも寺内小字大谷地には二基の環渚ある前方後圓墳を含み、二基乃至三基の圓墳も濠を繞らして居る。又大谷地の前方後圓墳の南に接して長方形の館址或は土城と思はるものありて、古墳との關係を明にすることは出来なかつたが、興味深いものである。

鹿島町を中心として西に眞野古墳群を見る外、東南の眞野村大内・江垂、北々西の八澤村永田・上眞野村原田・横手等にも多數の圓墳が見られ、同村浮田には稍大きい前方後圓墳があつたといふ。南の方原ノ町には完好の前方後圓墳あり、北の方日田木・中村町の周縁八幡村・飯豊村にも古墳群があり、八幡村高松の埴輪土偶を有する古墳は著名である。更にこの地域には砂岩質の斷崖に掘りこんだ横穴墓が多く、種類と變化とに富み、遺物の發見も傳へられて居る。特に前記高松の丘上の古墳群の兩側には多數の横穴があつて土陶器・勾玉・管玉・刀劔等の夥しい類が見出されて居る。眞野古墳群の周邊にあつても、上眞野村横手・新山・小山田・八澤村永田・西原・永渡・眞野村江垂・鹽崎等に横穴群があつて夥しい數に上つて居る。これ等は何れも從來學術的調査を経たもの

なく、今回もこれを發掘する暇なく、眞野古墳との關係を知ることの出来なかつたのは遺憾である。

眞野古墳群の分布地域は森林であつたと前に記したが、早く三四十年前に一旦開墾されて畑となつたことは地界の土堤と畦畔の跡に歴々と見られ、更に江戸時代末にも同じことが企てられて何れも放棄したのであると傳へて居る。終戦後、内務省の開拓營團の手によつて再び廣い地域に互つて開墾が計畫され、森林は伐採し樹株はブルトーンザを以て除去し、拓植者を續々入住せしめて漸く菜園の形が出来て來た。古墳地帯は全部この開拓地に包含され、既に一部の古墳は封土を失ひ石構の痕迹が僅に地中に窺はれるものもある。遠からず全古墳の姿を沒すること疑なく、土地の有志をして慨嘆せしめたのも故なしとしない。特に鹿島町の元衆議員議員植松練磨・上眞野小學校長渡部晴雄・眞野村農業會長但野修清の三氏はこれが調査と保存の方法につき熱心に協議し、植松氏より慶應義塾大學史學科に學術的調査の懇願あり、茲に本古墳調査の端緒となつたものである。

尤も古墳群調査後に上記三氏並に大内重春氏等の熱意によつて、福島縣は史蹟としてこれが保存の爲めの假指定を文務省に申請し、別に大内氏等は種苗會社を興してその苗圃の内に寺内古墳群を收めて保存施設を計畫中と

聞く。東北地方にあつて古墳が文化資料としてかくの如く社會的に認められたのは最初であつて、其點に於ても眞野古墳群の重要性を強調する必要がある。又東北に於ける古墳の學術的發掘調査は稀有の例で、この古墳が前後二回の調査を経たことは特筆すべきであらふ。

二 調査の經過

眞野古墳の最初に學界に紹介されたのは大正十二年であつて、縣史蹟調査委員小此木忠七郎氏がその年五月の人類學會例會に一古墳の發掘を報告し、人類學雜誌三九ノ三號に「昨年發掘されたる福島縣下の古墳」と題して概要が載せられて居る。この古墳は大谷地六十山林中とあれば寺内第七號墳に當るもので今直線道路の南傍に残骸を存し、封土の周縁のみが見られる。圓墳の中央に設けられた石室は、砂岩質の切石を長方形に立て並べて粘土を厚く塗りに切石三枚を並べて蓋としたもので、内に鹿角製刀子一と竹櫛一とを伴葬した女子の人骨が埋葬してあつたといふ。後に柴田常惠氏の調査された古墳もこの附近である。この粘土塗石櫛ともいふべき石室は、今回の調査に當りても地方的特色として注目されたもので、遺物の少ない點も一致して居る。

昭和二十二年に至り開拓營團の手によつて伐採掘鑿作

業が進行し、古墳の存立も危くなつたので、植松氏は學術的調査の必要を認めて慶應義塾大學松本信廣教授に交渉あり、仍て史學科江坂輝彌は七月七日・八日の兩日この地を踏査し、同行の後藤守一氏と共に詳細の狀況を見聞調査した。それによれば寺内古墳群の前方後圓墳一基は粘土採掘によつて後圓部中央に砂利層の見られる程度に破壊し、小池原古墳群の内二基の圓墳は開拓營團技手原田道雄氏の發掘によつて石室を露出し、その一には人骨の殘存を確認し、他の一には甲の小札様のものを發見したといふ。特に興味あるは後者の封土畔から耕作者小林吾助氏により青銅馬鐸三個が密集埋藏せるを發見されたことで、高さ一二纏の立派なものであつた。馬鐸二個はその際義塾大學考古學研究室に寄贈された。

七月三十日より八月一日に至る三日間を以て更めてこの地の豫備調査をなすこととなり、講師藤田亮策・助手清水潤三・學生江坂輝彌・堀田穰井に明治大學講師後藤守一氏と一行五人は鹿島町を本據として眞野古墳本調査の計畫を進め、小池原古墳二基の内容調査に着手した。寺内に於ける前方後圓墳の破壊に瀕せるもの（寺内二〇號）は後圓部の中心まで掘鑿されて居るが棺槨の所在が認められず、大土工を要するのでこれは中止した。小池原の二基はさきに原田氏の發掘せるもので（小池原七號・

八號)既に石室の一部露出せるを以て、七月三十一日午後と八月一日の午前中に附近の住民五人の助力を得て發掘し、石室の構造を明にし遺物の有無を探り實測を終つた。七號墳には遺物全く見られず原田氏發掘の時の骨格の石室外に置いてあつたものを蒐集した。八號墳の石室底には木炭を敷き石壁に丹を塗り、鐵器片の殘存ありて以前に鐵製馬具類の發見されたのがこの内部からであることを確認出來た。但し銅馬鐔は、丘の西北隅で石室外にあつたといふ。八月一日午後には程近い新山の横穴群を踏査し、一横穴内發見の陶壺等を見ることが出來た。會ては勾玉・管玉の發見がこの附近にも少からずあつたとのこと。

八月中旬には縣立相馬中學の教官生徒は社會科研究の參考として、小池原に一基(小池原二〇號)寺内に一基(寺内三九號)を選択して調査し、小池原から土師器壺一個を發見して居る。

十一月二十日から十二月五日に至る半月餘に亘り、この古墳群の本格的調査の出來たのは、文學部長間崎万里氏の努力と史學科教授各位の聲援によつて塾當局の特別の好意ある取計を頂き、時局柄に拘らず調査費を支辨された結果であつて、學術研究の爲めとはいへ感謝の外はない。特に松本信廣・同芳夫兩教授、間崎部長、西岡塾

長秘書は直接調査に参加して督勵され、助手、學生諸氏は極寒下に發掘作業の實務を擔當して僅か二週日の間に十六基の古墳を發掘調査するといふ驚くべき結果を挙げ得たのである。又縣史蹟調査委員梅宮茂氏は調査に食糧調達に終始應援され、官公署及び學校方面の連絡は氏の厚意に負ふものが多い。人力の不足を補ふ爲めには鹿島中學、眞野小學、同中學、八澤中學から生徒の勞力奉仕を得、特に相馬中學からは遠路を三日に亘り交代に助力され、原ノ町農產學校生徒の手馴れた鋤鎌の援助も大に調査を進行させた。連日に亘る渡部晴雄、植松練磨、但野修清、大内重春四氏の熱心の後援と共に記して篤く感謝の意を表する次第である。

今回の調査は寺内・小池原兩古墳群の配置圖作製と、寺内地内の古墳の内から各種形式の代表的のものを選び發掘調査するにあつて、測量・撮影・發掘・記録と型の通りの研究方法が採用されたが、寒さと日の短さと勞力の供給者が毎日違ふといふ點で不便が多く、僅に慶應大學學生諸氏の勉勵によつて好結果を齎らしたのである。又發掘には清水・河北兩助手を中心として江坂・堀田・山鹿・向井・谷・杉上其他の學生は各一基又は二基を分擔し或は補助して調査に當り、墳丘と石室の實測にも從事した。古墳配置圖の平板測量は主として藤田・堀田の

擔當であつた。

以上七月及び十一月の二次の調査と、八月に於ける相馬中學の調査の古墳とを合せて表示すれば次の如くなる。

(イ) 小池原古墳群

番號	假番號	形狀大小	發掘狀況	遺物	調査月日	調査者
七	1	圓墳 徑12m	塊石積石室	人骨	二二・七・三一	後藤・江坂
八	2	圓墳 徑約14m	同	鐵馬具 銅馬鐙	二二・七・三一 二二・八・一一	藤田・清水
二〇		圓墳	同	土師器壺一	二二・八	相馬中學校

(ロ) 寺内古墳群

番號	假番號	形狀大小	發掘狀況	遺物	調査月日	調査者
七	103	圓墳	粘土張箱形石室	人骨・刀子	大正 二二・五・一〇	小此木忠七郎
二〇	111	前方後圓墳	砂層三段 石室なし	刀子	昭和 二二・十一月	河北
二三	116	前方後圓墳	砂層三段 石室なし	刀子	昭和 二二・十一月	河北
二四	115	前方後圓墳	砂層三段 石室なし	刀子	昭和 二二・十一月	河北
二七	118	圓墳	同	同	同	河北
二六	117	同	同	同	同	河北
二九	2	同	石室なし	同	同	江坂
三五	6	同	同	直刀	同	江坂
三六	7	同	同	刀子	同	江坂
三七	8	同	同	頭蓋 四肢骨片	同	山鹿

(ハ) 其他

名	稱	形狀大小	調査狀況	遺物	調査月日	調査者
三九	10	圓墳	石室の設備	石室箱形 丹塗	昭和 二二・十二月	江坂
四四	22	圓墳	なし	頭蓋・下顎 四肢骨盤等	昭和 二二・八月	相馬中學校
四九	29	圓墳	川石積船形 石床	石製漢造品 白玉・直子・ 白・鐵・ 鐵・鐵・ 玉・管・ 玉・切子・ 玉・丸・玉・小	昭和 二二・十一月	清水・山鹿
六一	303	同	同	同	同	河北・松本
六二	304	同	同	同	同	清水
六四	305	圓墳	箱形石室	直刀・刀子 金環・短刀・ 刀子・鐵・馬 具類	同	清水・河北・ 江坂
七〇	311	同	石積長方柳	同	同	清水

三 小池原の古墳

上眞野村字小池原の古墳群は寺内小字八幡林の古墳群を西に去る約一軒にあつて、所謂長者堀なる舊用水路に沿うて東西位に二十基が配列され、最近まで樹林中にあ

名	稱	形狀大小	調査狀況	遺物	調査月日	調査者
大谷地土城	長方土城	城内礎石列	土師器	同	二二・七月 二二・十一月	藤田・堀田
新山横穴					二二・八・一	
磨崖佛					二二・十二月	

つて完形を保つことが出来たのである。右の内八基は直徑約八—一二米で墳丘高く、湊を繞らすものは無い。昭和二十二年初夏に原田氏の發掘した二基は七月末に至り余等の再調査を経て性質を明にし、他に一基は相馬中學の發掘に係る。外に三基は封土を削平されて居るが盜掘されたとは思はれず、他は完全である。

〔第七號墳〕 直徑約十二米の圓墳で今その三分の二は耕作により削平されて畑となり、東南の一部のみが原形を保ち高さ二米を示して居る。封土の中央下に頭部を東にし、西西南に横はる石室があり、石室内には一人骨のみで伴葬品はなかつたらしい。原田氏の調査に當り北側の積石を取除き内部を攪拌して人骨は封土外に放置してあつた。人骨は頭蓋片・下肢骨・骨盤・齒のみで十二三歳の童男又は童女と思はれ、石室内に骨片の殘存するによつてこの古墳に屬するものたること疑ない。東西三米南北略一米五〇厘の範圍に川石を置き川砂を巻き、その中央に塊石積の長さ一七〇—一六〇厘、幅頭部（東）にて四五厘、中央部五〇厘、足部（西）三五厘、深さ三〇—四〇厘の長方形の石室を作り、底面は粘土層の上に川砂を敷き、石棺・木棺の納められた形迹はない。石室の長軸は約三十度を南に傾いて居て東枕である。伴葬遺物は全く見られなかつた。石室の上には大きな平石二枚を

被ひ、その空隙と周縁には河石をあてて粘土を塗りあり蓋石上から現在の封土上まで一米二〇厘あつて、本來は更に五〇厘以上高かつたことが察せられる。

〔第八號墳〕 前者と七、八米を東北に隔てて長者堀に接して立ち、直徑約一四米、高さ二米餘の圓墳にして西邊一部は削去されて段をなす。墳丘中央部から圓孔を穿つて石室の蓋石一枚を取はづしあり、同じく原田氏の發掘に係る。石室は川石を長方形に積みて長さ二米、幅頭部、腹部にて四〇厘、足部にて三〇厘、高さ六五厘を算し、底面から高さ四〇厘にて四方から石を積出して持送とし、上に三枚の平石を被ひ間隙に川石を載せ粘土を塗り込めてある。底は木炭層があつて石敷も川砂も無く、厚さ二厘位の木材の腐朽片を見たが木棺の存在を推定するには餘りに石室は小さく、殆ど人體一人を納めて餘裕は無い。然し内部に鐵の飾金具・圓鋏等あるによつて曾て發掘された鐵製馬具がこの石室内に屬すること疑ない。石室の側石には赤色の丹を塗つてある。底面から一米八〇厘上の封土中に川砂層の彎曲を見せ、更に七〇厘にて墳頂に達する。本來の墳高は二米五〇厘なることが知られる。青銅馬鐙三個は墳丘の西北隅から耕作中發見された由で、三個が同一型によるかと思はれ、綠青の美しい黄味勝の青銅鑄造品である。高さ一二・七厘、幅は

下底七纏、肩四纏、方形の釣り頭は二・五纏、鐸の半面を四區に分割して斜格子文を作り内に粟粒文を飾り、他面は滑平にて文様はない。我國の高塚時代中期に見られる優れた鐸で、この種の内の大形に屬する。鐵製馬具は轡の銜・鏡板・引手并に辻金具の類で鏡板に太い兵庫鎖の連續あるは稀らしく、革金具は革帶に鋏留として吊金具・環金具・尾錠があり雲珠一個も見られた。別に平背兩刃の刃子片と鞘の斷片を見出し鐵鏃片と思はれるものもある。七月の調査に當つても小鐵片が多數發見され、鍍金の痕迹のあるものも見られた。武器少くして馬具のみ伴葬の例は珍らしい。何れにしてもこの種の狭い石室内には土陶器其他の副葬は困難であるが、装身具の見られないのも心淋しい。

鐵 轡

一

棒銜・鏡板・引手等

鐵 雲 珠

一

鐵 尾 錠

二

馬革用

鐵 製 辻 金 具

一

革金具・辻金具等數種

鐵 刀 子

一

平背・直身

青銅馬鐸

三

〔第二〇號墳〕 直徑十五米を越える稍大形の圓墳で高さ二米半、八月に相馬中學の教官と生徒とが開拓營團のブルトーザの助力により調査したもの、石室を露出して

蓋石は散亂して居る。第七號墳と構造を同じくし、石室は東北より西南に傾き、その長さ二米、幅五〇纏、内部に何物も見ず、石室上部約二尺の封土中に赭色丸底の土師壺一個を見出し、今相馬中學に保管して居る。石室内の伴葬品ではないが、その直上にあつて埋葬當時のものとして誤なく、時代判定の良き資料と考へる。

以上小池原古墳の構造の知り得べきもの三例に過ぎないが、川石積の長方石室に板石を被ひ更に大小の石を石室の周圍と蓋石の隙間にあてて粘土をつめた點は一致し屍體を葬るに足るだけの狭小のもので、伴葬品の一部が石室外にある二例を見た。この古墳群の性質の一斑は之によつて窺はれる。

四 寺内小字八幡林の古墳

眞野村字寺内古墳群の内、直線道路の北側は小字八幡林に屬し、八幡社より西方約一杆に互つて點在し、其數は最も多い。これを五つの群集に分類することが出来るが、集團的位置の關係ばかりでなく、石室の構造其他にも多少の特徴が見られる。

A區(一・二・三)は八幡宮の西隣にいま三基の圓墳を見るばかりで、その内二基は封土が削平されて低い。曾ては八幡社の背面及び側面にもあり民家の建築等によつ

て除去された由で、この附近に數基を數へ得たものと思ふ。

B區(二八・二九・三〇)は小字大谷地の二〇號前方後圓墳を中心とする一群に屬するもので、その内二九號を調査した。

C區(三一・四三)は寺内臺地の北端にあつて落合部落に向つた北向の急傾斜面に接し、比較的高い墳丘があり環濠のある一圓墳を含む。この内三五・三六・三七・三九の四基を發掘調査して粘土張り石室の四例が見られた。

D區(四四・五二)は臺地の中央にあつて比較的大形の圓墳が群集し、十一月に調査した四九號圓墳は完全の環濠を繞らし川石積船形槨なる特殊の構造を示して居り、眞野古墳群中の高大の一例である。その他の圓墳は多くは封土の上半を失つて低平となり、五〇號墳の如きは四九號墳に劣らぬものであつたといふが、曾て瓦窯が築かれて今僅に小高く面影を遺すのみである。

E區(五三・七五)はC區に續いて臺地の端に西に長く連亘する一群で、北側林中のものが完存し、南側のものは削平されて姿を沒したものが多く、十一月に調査した六〇・六一・六二・七〇の四基は何れも封土を失ひ、僅かに土中に亂石を認めて漸く探知したもののみである。

但しこの四基に於て最も遺物の豊富であつた點は注目に

値する。

〔第二九號墳〕 周圍から削られて居るが直徑約八米、高さ一米半程の圓墳で、頂部に凹みがあり粘土を採掘した迹と思はれる。幅二米のトレンチを作り西側より掘進み、現在の地表面下に至るも棺槨の構造なく、中央下には黒土層深くして土師器及び縄文土器片少からず混在し石器時代の竪穴跡に塚を築きたるかと思はれる。南隣の前方後圓墳及びD區の四四號墳等に棺槨のなかつたことと共に、注目すべきである。

〔第三五號墳〕 C區東端に當る直徑一二米、高さ一米半の小圓墳で、墳頂中央下一米餘にして四個の石塊が並列し、これを東北隅として幅八〇厘米の東西に長い軟な黒土層があり、略中央部に長さ九九厘米の直刀一本が東西に横はつて居るのを發見した。直刀下に小枝を焼いた木炭の薄い層があり埋葬位置たる明である。前記の二九號墳を初として小字大谷地の古墳群には棺槨の設備を遺さないものが少からず見られ、何れも木棺の類を使用して腐朽したものと推定される。

鐵直刀 一

平背直身、長さ九九厘米巾三・三厘米
木鞘及び柄木糸纏の一部を残存す

縄文式土器片

土師器片

土器はこの附近一帯に見られるもので、直刀所在位置

よりも更に深い部分にも少からず包含され、古墳の埋葬に關係のないものである。前記木棺址と思はれる軟質部は東西二米餘、南北八〇—九〇纏にて、東枕と假定すればこれを中軸として東西線から略、三十度を北に傾き、七〇號石室墳と同方向を取り他の多くの古墳とは異なつて居る。

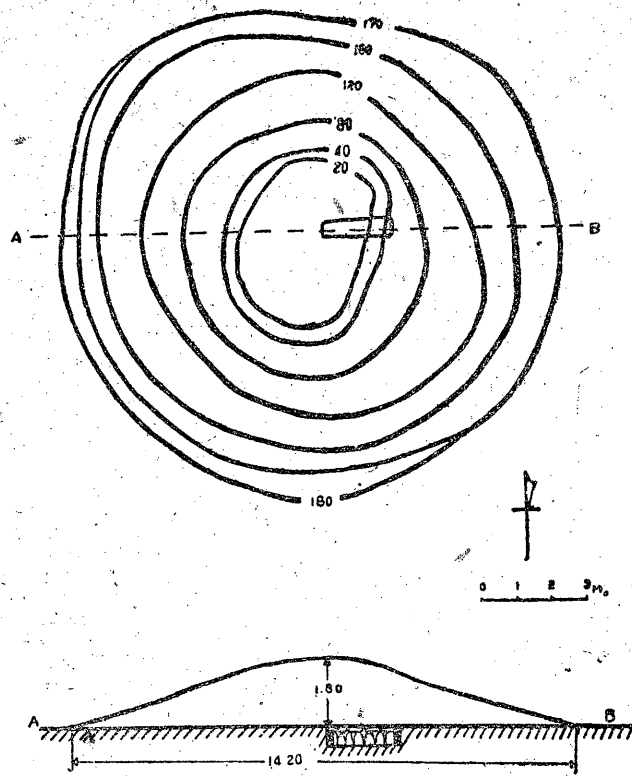
〔第三六號墳〕 前記の西西南に隣接し、直徑一米六〇纏、高さ一米七〇餘の圓墳で、墳頂下一米三〇纏にして中央より南寄に天井石に達し、東西位の石室を發見することが出來た。石室は板狀石英粗面岩の扁平面を内側にして二重に立て並べ、上に大石板三枚を覆うたもので、天井石は元より、石室の内外側面に良質粘土を塗り包み發見の當初はこれを石蓋を施した粘土棺かと思はれた程であつた。側石面の不揃ひのものは粘土を塗りつめて化粧し、上面・内面共に平らに鍍仕上げをして美しい眞紅の丹を塗つてある。従つて石室は赤紅色の箱形棺さながらで、長さ一米六三纏、幅四〇纏、西寄が心持狭い。方向は東西線に沿うて僅かに頭部が北に傾き、三五號墳と方向を異にする。比較的深くして床面は墳頂下一米八八纏を算し地平面下にある。床面は小枝製木炭の薄層の上に凝灰岩の板狀片を敷きつめ、遺物は北壁近くに刀子一個を見たのみである。封土中には多數の縄文土器片・丹塗

土器片等が包含され、この附近一帯が石器時代の住居址なることを知る。

鐵刀子 一 平背直身、長さ一三・四纏

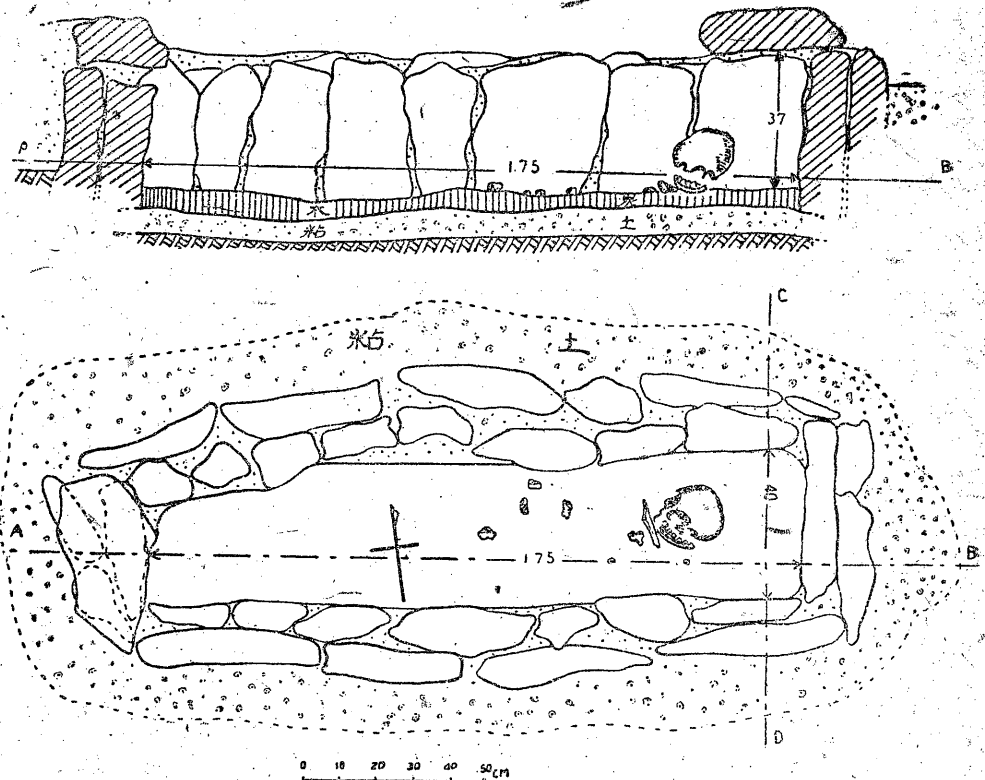
〔第三七號墳〕 前二墳と鼎形をなす位置にあり、直徑十四米、高さ一米七〇纏の圓墳にて、墳頂下一米八〇纏にして天井石の上に至り、石室は地平面下に掘込んで作られ蓋石を被ひ、封土を築いたことが知られる(第一圖)。附近の三五・三六・三八の調査古墳は何れも同様で、同一の構造を示して居る。石室は圓墳の中央下稍、東寄にあり、略、東西に横はる。板石を二重に立て並べて内法長さ一米七五纏、幅東部に四〇纏、西部にて三〇纏、深さ約四〇纏の石箱形を作り、帶黃灰白色の粘土を塗りつめて土砂の侵入を防ぎ、六枚の板狀自然石を上並べて蓋石とし、隙間には稍小形の板石を覆ふてある(第二圖)。内面四壁に赤色の斑點を遺して丹を塗つてあつたことを示す。床面は赤粘土層の上に六纏内外の木炭層を作り、その上に頭蓋骨が見られた。内側の側石は深く四〇纏も赤土層に差込みあり外側の石列は單に置かれたのみで、補強の爲めのものであることが知られる。東壁より二十二纏にして中央に仰面の頭蓋骨一個が置かれ、上肢骨其他の斷片數個が散亂してあつた。この頭蓋は原位置にありと考へてよく、東枕の伸展仰臥葬としたことが知

られる。長さ一米七五纏の短い石室内にて頭上に二〇纏餘の空隙のあるのは、何等かのものに納めて葬つたと考へられるが、何分幅四〇—三〇纏の狭いものであり、若し木棺を使用したとすれば、上半廣く下方の狭い長梯形の棺でなければならず無理である。伴葬品は見る事ができなかった。



第一圖 第三七號墳實測圖

〔第三九號墳〕 C區の中央部の圓墳にて直徑一六米、高さ東北にて一米八〇纏、西南一米四〇纏を算し、緩傾斜面に立つて居る。墳頂より發掘して八〇纏下に三〇纏



第二圖 第三七號墳石室實測圖

の砂層があり、次は地山土層にて一米五〇纏にて黒土層に達し天井石に當つた。墳丘築成の順序を示すものといへる。この古墳の石室は悉く石英粗面岩の截石を用ゐる、

側石は内面に美しい平面を並べてその外側に補強の爲めの塊石を一重又は二重に繞らし、天井石は方形の截石二枚が内側の側石に載つて居る。側石の間隙及び補強石との間には黄灰色の粘土を充填し、石室の内壁には粘土を塗らずして四壁の石面も天井石の下面にも美しい丹を塗つてある。石室の内法は長さ一米七〇糎、幅頭部にて四〇糎、足部にて三〇糎、高さは三〇糎内外で、比較的低い。床面は赤粘土層の上に木炭層を敷き、僅に東が高く西に傾いて居り、而かも東壁から六〇糎の間、高い部分に頭蓋・下顎・四肢・骨盤等が亂雑に散在して居るのは、浸水による自然移動と解釋される。方位は東西線に沿うて脚部が南に傾く。石室の構築が地平面下にあることは傍近の古墳例と同一である。伴葬遺物は一も發見されなかつた。

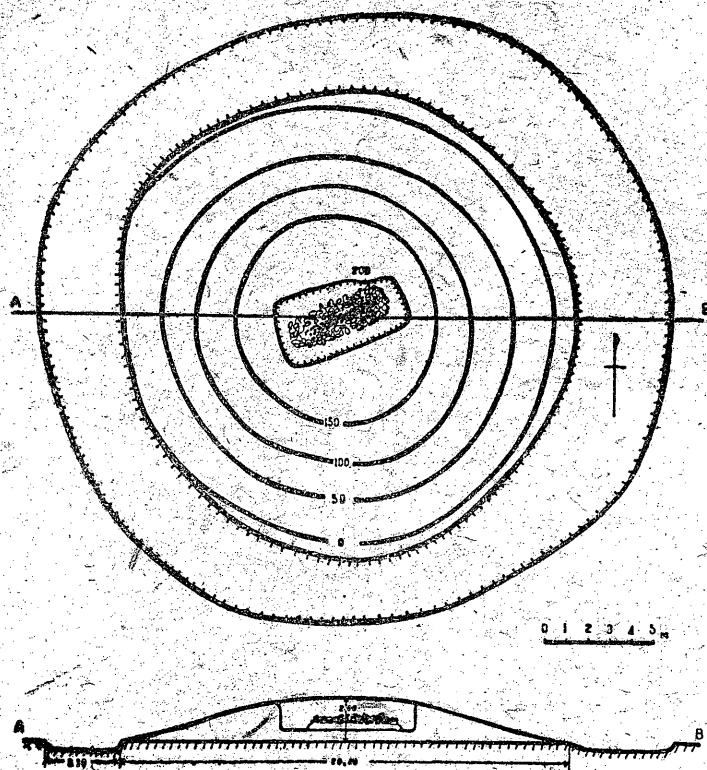
〔第四四・五六號墳〕 四四號墳はD區の東畔にある大墳で相馬中學の發掘にかかり、中央部を東西・南北よりトレンチを掘り地平面下に達して居るが、棺槨の構造は元より遺物を認めなかつたといふ。實地に就て見るに石構のあつた形迹は認められず曾て盜掠を経たものでもない。

五六號墳はE區の東端にあつて今丘上の南半を削りとり川石積の東西位の石室を露出し、之を甘藷の貯藏穴に

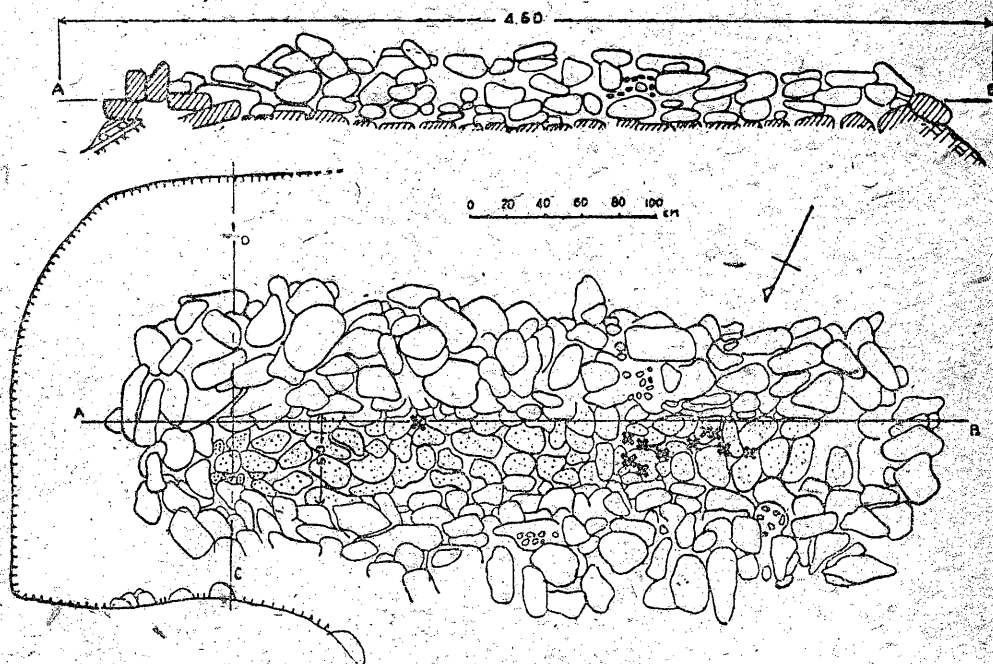
利用して居る。附近の五基の圓墳も何れも耕作の爲めに除去されて僅に形跡を知るのみであるが、C區の粘土塗箱形石室墓群の西に隣接してはるるが、構造は川石積の石室墓群たるE區に屬するものと思ふ。

〔第四九號墳〕 寺内古墳群の略、中央にあつて直徑二一米、高さ二米、周圍に幅三米半乃至四米半の濠を繞らし深き現在三〇糎、完好の圓墳で南北に地界の低い土手が通過して居るが盜掘の痕迹を見ない。頂上から發掘して墳頂下八〇糎にて早くも川石積に出會ひ、掘り擴めて長さ四米六五糎、幅一米八糎の區域に二〇—三五糎大の川石が一面に亂積の状態にあることを知り、その一部を取り除いて長楕圓形船形の一種の石構を表はすことができた(第三圖)。長軸は東西線に約三十度を西南に傾き、他の古墳の石室と略、同方向を示す。石構の中央幅四〇糎、長さ三米五〇糎は凹みて周縁は高く、石槽又は船の形に似て居る。この部の斷面を見るに赤色粘土の地山上に約一米一〇糎の黒土を置き、その上に石構の部分だけ厚さ一〇糎の黄褐色砂質粘土を敷き、上に石を積み重ねてある。中央の低い部分は一五—三〇糎大の扁平の川原石を一重に並べ、周縁の側壁は三〇—四〇糎の川石を横積にして高さ四〇糎餘の斷面三角形に積み上げ、外側には大形の石を斜にもたせかけて崩壊を防いで居る。船底

の平石上から封土頂まで一米二〇糎、地山の赤粘土層からは總高さ二米四〇糎あり、周湟の底と略同一平面に近い。石構の東端は構造稍、鄭重にて四個の石を半圓形に並べて頭部を保護し、西端には一部分底石を缺く處がある。全體船形にて所謂粘土槨に似て居るが、一種の寢臺形石床槨といつてもよく又石積船形槨ともいふことが出来る（第四圖）。上部には多數の川石を被うて蓋としたもので特殊の粘土張は見られず、地山と同じ赤粘土を被



第三圖 第四九號墳實測圖



第四圖 第四九號墳石槨實測圖

×印ハ石製模造品出土位置

うて封土として居る。この種の床槨は只今まで類例を聞かず、眞野古墳群の石室が總じて狹小のもののみなのにこれのみが長大の構造の見られるのも面白い。内部に木

棺等の施設があつたかどうかは明でないが、中央底面は細長く稍、平坦で、川石が亂積の儘で内部に充滿して居た點から考へても、何等か屍體包裝のあつたことを推定してもよく、調査に際しその痕迹も見出すことは出来なかつた。石床櫛の東北隅には別に遊離した石七、八個があつたがその性質は明でない。石櫛の下井に四周に黃褐色砂質粘土を敷いてあるが、特に粘土を卷いたものか否か明でない。石床上には骨片其他の殘存を見なかつたが遺體は石床上の東部に寄せて葬つたものらしく、西に近く、即ち櫛内壁東端から二米二二纏—二米九四纏の位置に石製模造品十一點が安置され、その部分の周圍には四—五纏の川石が充填してあることが眼についた。たゞ白玉のみは東端より一米五〇纏南壁に接し、單獨に出土した。石製模造品は悉く灰青色の滑石製で、原石は眞野川中流域の上眞野村上枋窪堂六神山麓に豊富に見られ、この地で作られたこと明である。

- 刀子 1 長八・六纏幅二・〇纏 革鞆の形にて二孔あり
 刀子 2 九・〇纏 二・三纏
 刀子 4 九・九纏 二・五纏
 刀子 6 一〇・五纏 二・四纏
 刀子 7 一二・八纏 三・一纏
 刀子 9 一八・二纏 二・七纏 (柄部折損)

刀子 11 九・四纏 二・四纏
 鎌 3 一四・二纏 四・二纏 尖端内彎
 斧頭 10 七・六纏 五・九纏 有肩斫頭
 槽 5 一五・七纏 九・一纏 四脚
 鏡 8 徑八・六纏厚二・三纏 圓鈕
 白玉 12 〇・五纏高〇・四纏 八稜小形

刀子は革鞆に納めたまゝの形を模して關に近く二孔を穿ち、柄頭の一端に挾缺のあるのを特徴とする。斧は袋穗で斫頭ともいふべきもの、鎌は鐵鎌の形をそのまゝに表はし、鏡と木槽との模型は珍らしい。石製模造品は畿内にて關東地方にても高塚時代の中期以後に見られるもので、武器・裝身具・厨房具・工具・農具等各種のものがあるが、本古墳のそれは精巧の例で而かも十一點も揃つて居るのは興味深い。以上の外に遺物を見ず鐵鏽の痕迹もなかつた。

〔第六〇號墳〕 第五二號の完全な大墳丘の南側から西にかけて、この年春夏の頃ブルト―ザを以て掘進拔株の作業が行はれ、早く封土を失つた小古墳のいくつかは蓋石その他の石が動かされて土中に隱顯するのが見られ、これ等のうち三基を探りあてて調査をした。これには松本信廣教授と梅宮茂氏の努力に負ふものが多い。

第六〇號墳は、最初多數の石塊が南方に集積してあつ

た爲めに石室の所在を求めるに困難を感じたがその北東に接して長さ一米六五糎、幅約五〇糎、高さ六〇糎の川石積長方石室を平地下に發見することが出来た。方向は東枕として東西線より南に傾いて居る。大石板はなく、三〇—四〇糎の平石を以て持送式に蓋としたものが、ブルトーンによつて一舉に南西隅に押除けられたものらしい。石室の幅が稍、廣くして木棺を納め得る餘地はあるが存否不明、石室内東邊に直刀・轡があり、刀子・鏃は散亂して居た。

鐵直刀	一	平背直身、楕圓鐔、鏃が附屬し、外に不明の鐵片がある。長さ六六・七糎
鐵刀子	二	長約一六糎、直身平背、一は鏃があり木鞘と木柄が認められた
鐵轡	一	棒銜に楕圓の鐵鏡板を附し、引手・綱手を附着す
鐵鏃	八	長一六糎内外の長鏃で約七糎は斷面長方形の扁平軸をなし、四糎の柳葉形廣双の鏃頭があり、四糎の莖には木質が残る
鐵鏃	二	クワイ形三角平葉鏃、木筧を以て挿挟む。五・九×三・四糎、四・五×三・五糎

鐵鏃の兩種とも特異の形をなし、長鏃も三角鏃も筧代が銹着きて木質で絲卷としたことが知られる。鐵刀子に鹿角柄らしいものの殘存が考へられたが銹化甚しく明でない。

〔第六一號墳〕 前者の西南一〇米に在りて同じく蓋石

を奪はれて埋没しあり。封土は早く削平されたものと思ふ。蓋石は一米半大の平石三枚が傍に見られ、石室の側石を持送式にして上に載せ、間隙に小石をつめたものらしい。石室は長さ一米八七糎・幅五〇—四〇糎・高さ六〇糎、大小の川石を不規則に積んで長方形とし、東西兩端には大形の板石を用ゐ、西端は稍、狹まつて居る。石室の四周には七〇—八〇糎の範圍に川石を積みて構造を堅固にし、底は地山を均して三糎の粘土を敷きつめ、上に二糎大の小砂利を敷き更に六—七糎の砂利を置き、遺物はその上にあつた。東壁から五四糎乃至七五糎の限られた區域に玉類が散亂し、一二〇—一三〇糎の點には朱色が砂利層を彩つて居た。東枕として玉類は頸下に當り朱色は腰下に當るか。石室長軸の方向は五三號墳と同一である。玉類を表示すれば、

瑪瑙勾玉	一一	長さ三糎内外、赤・暗赤・淡黃・乳白色等あり
碧玉管玉	二	長さ三・一糎、二・九五糎、徑〇・九糎、濃碧綠
水晶切子玉	一	長さ一・三糎、六角切子形
琥珀囊玉	一	長さ一・六糎、稍、扁平
瑠璃丸玉	一四	徑〇・八糎、紺色
同 丸玉	一	徑〇・六糎、紺色
同 小玉	四二	徑〇・二五—〇・四五糎、紺・碧・綠色
同 玉破片	三〇	

玉類は一聯となつて緒に貫き頸にかけたことが一定範圍内に散亂して居たことで知られる。勾玉は所謂丁字頭なく、稍、角ばりたるものも見られる。

〔第六二號墳〕 同じく封土を失つて天井蓋石は現在の地表面と同平面にあり、五四號の西南數米を隔てて、五四・五三號と略、一直線上に並ぶ。三米半に二米の長楕圓形に河原石積があつて、その中央に三枚の扁平自然石を並べて蓋石とし、その一枚は方一米半に及ぶ。蓋石の下石室は比較的小さい川石を小口積とし、東壁のみ大石を用ゐ、長さ二米八纏・幅六〇纏・高さ七〇纏を算し前二基よりも大きい、側石が押出されて陷落し不規則になつて居る。東は廣く西に狭まりて東枕と考へられるが、直刀・鏃・刀子等の遺物は東邊南側に寄つて居る。長軸は東西線に沿うて稍、北に傾き、他の例と異なる。床面を檢査するに、地山層の上に徑三纏内外の砂利を二段とし上に徑六纏程の小石層を置き、以上三段の間に粘土をつめ小石の上にも粘土を敷いて遺物はその上に安置されて居る。直刀・鏃などが顛落した側壁の小石の上にあるのは他の古墳にも經驗するように水の充滿して遺物を動かした爲めで、配置が伴葬當時のまゝとは考へられない。小石層の一部に朱色を見る。

鐵直刀 一

鐵刀子 一

鐵鏃 一三

平背直身兩刃、裝具消失、長さ九・五纏巾三・五纏、頭部南壁に沿ひ柄を東に刃を内に向け、平背直身、身の長さ約一〇纏、鞘・柄共に木質殘存

長軸附柳葉頭の長鏃一五・五纏内外長軸附刀子身形長鏃二〇纏以上のものあり

鐵鏃の内柳葉形の長軸附長鏃は五三號墳のものと同形同大であるが、鏃頭を直身の刀子形に作つたものは更に長くして特徴を見せ、同形のものは畿内・九州・朝鮮南部の古墳に見られる。竈代が竹でなく木幹なることは莖部に鏽着いた木質によつて知られる。刀子は木鞘で木の柄なること、これまた僅に木質が殘存して明である。

〔第六四號墳〕 直徑一三米、高さ約一米六〇纏の低い圓墳で、墳頂下四五纏にして石室の天井石に達し、石室底から約五五纏あるから、石室底面は墳頂下一米に過ぎず、地平面上六〇纏に築かれて居ることとなる。石室が地平面より高い位置に在ることは四九號墳のものに近く構造はC區のものによく似て居る。即ち平板石を立て並べて長方形の石室を組立てあり、東西兩端は一枚宛、南は五枚、北は六枚を立てて更に之に接して二重に板石を立て粘土をつめ、上に五枚の大石板を置いて蓋石とし、石と石との間隙には小さい石を置いて土の侵入を防ぎ、比較的構造堅固である。石室は内法縱二米、横四〇—

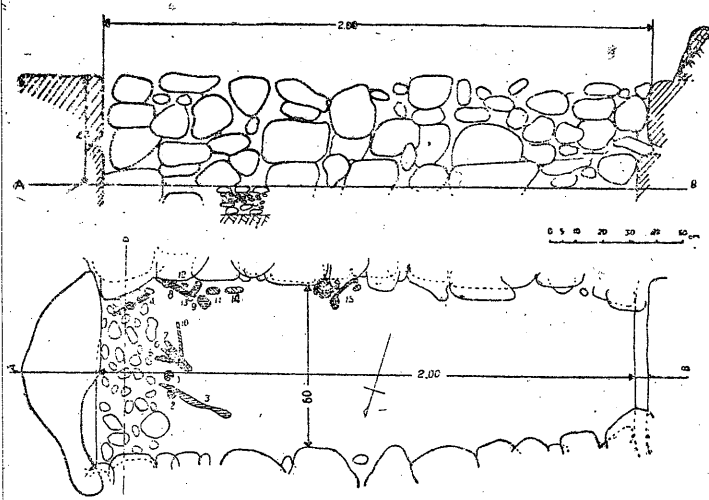
五〇糶、高さ四〇糶、東部稍、廣くして頭部と思はれ西部は狭い。底に小石を敷きつめ、南壁に沿うて直刀一と刀子一とが副葬してあつた。

鐵直刀 一

鐵刀子 一

平背直身、裝具消滅、長さ九・八糶、巾三・三糶、鋒を西にし又は南壁に向く
平背直身
柄に糸卷の迹を見る、破損缺失

〔第七〇號墳〕 寺内古墳群の西端に近い一群のうちの
一で、臺地の北端に在る。早く封土を失つて上を小徑が



第五圖 第七〇號墳石室竝遺物配列實測圖
(床石は一部のみを記入す)

1, 2, 金環 3, 短刀 4, 5, 6, 7, 刀子 8, 短刀
9, 13, 刀子 (折損) 10, 鐵鏃二個 12, 鐵鏃
15, 馬具類 11, 14, 鐵鏃 (一括銹着)

通じて居る。石塊點々とするのを探つて發掘し、地表面下に川石積の石室を發見した。側壁は川石を無雜作に積上げ、東西兩端のみ横長の石二枚を重ね、内法長さ二米幅六五糶、高さ四〇糶の石室を作り、西端は狭まつて四五糶となる(第五圖)。周圍一米の範圍に川石を入れ石室は其中央にあり、天井の板石は見當らずして側壁積と同大の石塊が内部及び周圍に顛落して居るのを見ると、持送式に積上げて天井を構築したものかと思ふ。五三號墳と併せて考ふべきである。底は小石を二段積とした上に小砂利を三層に重ね、更にその上に平な小石を敷きつめて鄭重に構成してある。東半部の南側に鐵製の各種の馬具・武器があり、原位置のまゝとは思はれず埋葬後の異動が考へられる。

金環 二
鐵短刀 二
鐵刀子 五
鐵長鏃 六
鐵扁平鏃 二
鐵馬具 一

銅鍍金、徑約二糶大 斷面圓、一方に缺狀に開きあり
平背直身兩刃、長さ三〇糶餘、巾二・二糶
平背直身、長さ一六糶内外、内一例丸形柄頭の中央に鳩目孔がある扁平長軸の先端柳葉形となり莖があり葛卷の痕跡がある
鋤先形の扁平鏃で莖なくして篋代を挟む、長さ四・七×四糶
棒銜・環形鏡板・尾鏡・革金具斷片等がある

馬具・扁平鏃・長鏃・刀子は共に五三號墳の出土品に類し、石室の構造と共に一致する點の多いのは明白

い。所謂金環なる銅製鍍金の耳飾は本古墳群にては最初の例である。

五 寺内小字大谷地の古墳及び土城址

眞野村寺内古墳群の内、直線道路から南は小字大谷地に屬し、約二十四基の古墳が現認され、うち二基は環濠を有する前方後圓墳で、本古墳群の宗主の觀がある。今回の調査の目標の内にこの前方後圓墳の含まれて居ると當然で、南接の長方土城址と共に最も期待をかけて居たものであつた。然るに多大の人力と經費を費したるに拘らず、前方後圓墳は棺槨の構造を遺さず、土城址亦この年十月にブルトーンザによる破壊の厄に遭つて土堤を崩して濠を埋め、内部は掘鑿されて礎石列も散亂し、眞野遺蹟調査の目的の半を失つたことは遺憾であつた。然し乍ら學術的調査は遺物の有無に拘るものでなく、その性質を明にするを以て足るもので、調査の結果は得る所が少くなかつたといへる。この古墳群も二區に分つて考へられる。

A區(四一五)は八幡宮の入口附近から土城址の東方に當る十七基で、大正十二年發掘の竹櫛出土圓墳は中心になる。最東の六號墳か或は今失はれた他の一基から會て直刀其他の發見があつたといふ。

B區(一六一二七)は二基の瓢形墳を含む一群で密集して居る。八幡林のB區の圓墳もこの一群の一部と見なしてよい。この内二〇・二四號の瓢形墳と二六・二七號の兩圓墳を調査して遂に何等の遺構を見ず、封土を奪はれた二三號の小墳から刀子柄を發見した。

〔第七號墳〕 縣道工事に裾の一部を切られ大正十二年五月發掘されたもので、小此木忠七郎氏の報文によるにC區の石室と同様の粘土張丹塗のものと思はれる。即ち砂岩質の二尺に三尺位の扁平切石を組合せて内法五尺六寸、幅一尺二寸、高さ約九寸の長方形を作り、長方形の切石三枚を蓋石とし、隙間に粘土をつめ、石室内面にも五分位に粘土を塗り、窪みには丹色が遺存して居たといふ。内に三十歳前後の女の遺骨を葬り、右上膊に接して刀子あり櫛も發見された。

鹿角柄鐵刀子 一 平背直身
鹿角柄は赤漆塗、手摺あり

竹 櫛 二

〔第二〇號墳〕 道路に接し東西に横はる前方後圓墳にて總長さ二八米五〇糎、後圓部の徑一六米、前方部の幅約一七米、後圓部の背面に幅二米の環濠が遺つて居る。三十年前までは完形にて濠も周圍に繞らされてあつたといふ。縣道工事によつて後圓部の北側一部が削られ、壁土採集の爲め次第に掘り取つて後圓部に廣い溝が穿たれ

中心は失はれて明でないが現存の部分で高さ三米を算する。中心線は東西線に沿うて約三十度南に傾く。

後圓部の掘鑿溝は幅三米にして北側は開いて八米となり地表面下まで及んで居た。この破壊部の中央に幅一米半のトレンチを作つて北から南に掘進するに、封土中に三段の砂層が水平に平行して居ることが認められた。各砂層には粘土を含んで固くなつて、同一幅で走つて居り古墳築成の一方法であつたことが知られる。即ち封土そのものは茶褐色の粘土交りの土層で三段の砂層がその間に介在し、上から第一・第二砂層は明に墳丘表面の形に従つて曲線を描いて居る。第三層は略、水平でその下に黒土層があり赤褐色の地山粘土層に續く。封土を盛るにつれて第三砂層を被ひ、封土を重ね第二砂層を作り更に封土を積んで第一砂層を作るといふ工合に搗き固めていつたものらしく、墳丘の保存の上に優れた手法である。新羅の舊都慶州邑内の古墳が正半球形を今に保持して居るのは、封土の間に數段の小石又は砂利層を挿んでゆくからで、畿内の上代古墳に見る葦石も同じ効果を目ざしたのである。トレンチの掘進につれて後圓部の中心と思はれる部分に、突然第二砂層と茶褐色の封土とが斜にたち切つたかの如き状態に消えて軟い黒土層となつて居るのが認められ、掘進二米にして再び第二層が表はれ、ト

レンチが黒土層を直角に切つた形に感ぜられ、何等かの遺構か盜掘孔かを思はしめるものがあつた。周圍の土層の關係上曾ての盜掘は考へられず、腐朽性の棺槨の埋葬場所と推定すれば第三砂層の上、第二砂層と第一砂層にかけてであつて、黒土層の東南隅に木炭の痕迹があつた。念の爲め前方部中央に堅溝を掘つて棺槨の存否を調査したが、三段の砂層以外に何物も見ることができなかつた。この構造に關する考察につきては後に述べることにする。

〔第二三號墳〕 第二四號瓢墳の後圓部の東に近く封土を失つた圓墳の石材の散亂するを見て、これを發掘調査した結果、東西約一米六〇糎、南北五〇糎の空處を繞つて川石の繞らされたるを發見し、その東端に近く刀子柄一を檢出した。ブルトーザの威力によつて破壊して原形を明にし難い。數片の土器片は古墳の伴葬に關係なく、附近の土中包含の石器時代のものと思はれる。

鐵刀子柄 一

土器片 若干

〔第二四號墳〕 西に向つた東西位の前方後圓墳で總長さ二四米七〇糎、後圓部直徑一七米、前方部の幅一二米後圓頂の高さ二米八〇糎を測ることができ、幅四米半の空濠を繞らし濠の深さは今二〇糎に過ぎない。中心軸は

東西線に沿うて約三〇度を南に傾き、二〇號墳と平行して居る。二〇號墳の不明の點を知らんとして後圓部に一米幅のトレンチを直角に掘り、墳頂から深さ一米四〇糎にして第一砂層に達し、更に八〇—九〇糎にして第二砂層を見約五〇—六〇糎下に第三砂層があるのを知つた。

第三砂層は墳頂下二米八〇糎にありてその下に黒土層に續きて赤褐色の地山層なることが知られ、更に七〇糎下は砂礫層となつて棺槨の構築を見られなかつた。たゞ後圓部中心下第二砂層と第三砂層との間に黒色の腐蝕土の如き軟き部分ありて長さ一米半餘、幅六〇糎、高さ四〇糎を計り、周圍の土質と全く異なつて何等かの埋藏を想像せしめる。但しこの部分にも何物も見出すことは出来なかつたが木棺等の腐朽性のものの存在は考へられる。金屬其他の装身具又は副葬品の何一つ無いことを不可解とする。三段の砂層并に軟質黒色土のあることは二〇號墳と性質を等しくし、而かも困難の問題を遺して居る。

〔第二六號墳〕 前記の瓢墳の西北に近い小圓墳で東方から掘つて砂層關係を調査した。第三砂層は略、水平にて第二砂層は中央にて約五〇糎、墳丘端にて一〇糎の差にて斷面弧狀を描き、第一層もこれと平行である。棺槨の構造を見られないことは瓢墳と同様である。

〔第二七號墳〕 二四號瓢墳の西に隣接する稍、大形の

圓墳で、亦棺槨の有無を知る爲めに墳頂に丁字形の縱溝を穿ち、墳頂下二米にして第三砂層に達し、第二砂層と第三砂層との間に軟質黒土層を見る外特殊の遺構を見ることが出来なかつた。

斯くB區の古墳は小字八幡林の二九號を加へて五基の古墳が何れも石又は粘土の棺槨の構築なく、遺物を見ることの出来ないのも不可思議である。これを解釋する爲めに（イ）擬墓にして埋葬しなかつたか、（ロ）木棺葬又は樹皮包葬で腐朽したか、（ハ）織物又は蓆等の植物包葬であつたかの何れかと考へてよい。（イ）の擬墓は單一の例ならばあり得るが、一群の墓が擬墓である筈なく、黒色軟質部の存在が之を否定する。（ロ）、（ハ）の腐朽性のものによつて埋葬したことは十分考へ得られるし、腐蝕質土が一米半餘に六〇糎の長方形に近いことは木棺であつたと考へるのが合理的のようと思ふ。只そろつて装身具も副葬品もなく、齒牙等の硬質部の殘存のないことが疑問として殘される部分である。同じ眞野古墳群にも既述の如く三種の葬法があり、時代的に或は何等かの理由で木棺葬の行はれたことを考へてよい。石造の構作物を見ない古墳は西日本にも稀ではない。

〔土城址〕 大谷地古墳群の南に隣り、特に第二四號瓢墳に接して長方形の土壘址がある。眞野長者傳説の館址

とされ又寺内の南丘にある城址の倉であるとも傳へて居る。二十二年七月末に見た際には一米の深さの空濠を繞らし厚い土壘を四方にした土城址は、堂々たる威風を放つて居た。古墳群と同時代とは考へられないにしても、礎石群の検出とか土器の發見によつて、その性質を明にせんことを望んで居たのであるが、不幸にしてその年十月に全部壊滅して、實測さへも出来ない状態を遺憾に思ふのである。僅に残存状態から半ば推定による實測値を見るに、南北は東にて四三・二米、西にて四四・二米、東西は北にて三四米、南にて三四・五米を算し、四隅に僅に丸味を持つた長方形である。右の内空濠の幅一・八一・九米、土堤幅約三米を除き、土堤内は平坦で東の中央に門址が見られた。濠の深さも土手の高さも何れも一米餘であつたが今は測ることも出来ない。濠は雨期には水を湛へ、昔は遠く西南の自然池から水を引き、今も堀跡が遺つて居る。土堤の上には大木が並んで居た由で巨大な切株が残されてあつた。土堤から約二米を隔ててこれに沿うて五列又は六列の自然石の礎石が並び、東北・西の三方に今見ることが出来る。只ブルトーズにて掘鑿されて位置が動き或は埋没して原形に復原は出来ない。礎石は三〇―四〇纏の川石で、下に砂利敷の列が見られる。非常に長い廻廊又は倉庫と見られ、殿閣の跡とは考

へられない。土城内に瓦も土陶器片も見られず、南方の土堤に赭色の土師器一個分の破片を拾得したが、この城址との直接關係は明でない。餘りにも整然たる構造は古墳との時代に相當の隔たりが考へられ、奈良朝以後の館址とするには建築址に疑問があり、山上の城址の研究と共に、改めて調査の必要がある。

六 眞野古墳の示す文化的特徴

以上眞野古墳の示す遺跡としての特徴を見るに、(イ)瓢形墳・環湮墓はあつても全體として小規模で、近畿・中國・九州に見る壯大のものは無い。然し關東・東山地方にもこの程度のもものは少からず散在し、東北地方にあつては二三の特例を除き一般にこの大きさのものが普通で而かも特色ある群集墳といへる。(ロ)石室の雄大な構築なく、眞野に於けるものは悉く構造は竪穴式石槨と同じくして形は石棺に近く、木棺を容るる餘地のない狭小のものが大半を占めて居る。粘土卷丹塗のもの如きは明に特殊の石棺といつてよい。(ハ)地區的に石室の構造を異にするものあり、四種に區別できる。(1)大谷地B區を中心として瓢形墳を含む大小の古墳の内部には石造の構築なく、三段の砂層を入れた封土の間に黒色柔軟の部分があつて、明に人工的に埋藏された何物かが考慮され、

木棺又はその類似の埋葬で硬質副葬品のなかつたものと推測される。二〇・二四・二六・二七・二九・四四等はこの例に數へられる。(2)四九號墳の一例のみであるが石

床式船形積石槨ともいふべき特殊の構造で、船形に川石を敷き、上にも川石を覆うたもので、この上に木棺等の存在したことも推定される。未だ他に類例の發表を見ないものである。(3)八幡林C區の石室は、板石を縦に二重に立て並べて長方形の石棺形を組立て、石の間に粘土をつめ、その或ものには内面にも粘土を塗り丹を以て彩色し、大きな板石を敷き並べて蓋としたもので一種の石棺とも見られるが、小形堅穴式石槨ともいへる。底面に粘土と木炭とを敷いてある。次の種類の石室に比較して幅は廣く稍、深いが多い。七・三六・三七・三九・六四はこの好例で比較的に遺物が少い。(4)寺内並に小池原に通じて最も多い形式で、川石積の堅穴式石槨といふべきものであるが、形は小さく頭部に比し足部が狭くして中國の木棺に似て居り、内に木棺等の納められない程度のものである。扁平の大きな野面石を蓋とし隙間に他の石を被うてあり、石室の周縁にも或る範圍に川石をつめて小規模の積石墓の形をなす。扁平の蓋石の代に小さい川石を持送式に積上げたかと思はれるものもある。内

粘土をつめてあり、又底面に砂利小石を敷くを常とし、木炭を置いたものもある。八幡林E區並に小池原の古墳の大半はこの類に屬する。

以上同一古墳群にあつてかくの如き形式を異にする特異の三種の石槨を見ることが出來、(3)(4)の二類は明に槨にして棺を兼ねたもので、上代古墳の構造としては所謂粘土槨を除き最も簡單素朴のものといふべきである。槨内の狹小なために裝身具並に身に佩びた武具の外には僅に馬具の一部が副葬されて居るのみで、關東地方にも多い陶土器祭具の見られないのは、これを入れる餘地のないことも一つの原因である。小池原の古墳の二例は槨外に埋藏したことを知つた。附近の新山、江垂其他の横穴墓には明に陶器伴葬の例があり、又八幡村高松等の古墳横穴共に大形壺・高坏其他の排列の例を聞く。眞野古墳群が陶土器を缺き石槨の小さいことは、地方的差か時代的特色か、他の古墳の學術的調査の行はれて居ない今日にあつてはいふべき材料がない。將來の研究に對して基礎的資料の一を提供するに止める。(3)(4)が木棺の使用を否定するに對して(2)は木棺を容るる餘地あり(1)に至つては木棺の存在によつてのみ解釋されるのである。異なる埋葬形式の由つて來る所以は今日の調査のみでは輕々に論斷出來ない。

(二)調査古墳の全部の石室が東西に横はり而かも頭部を東にして居ると考へられることは注目すべき點である。右の内長軸が東西線に沿うて稍、南に傾くものと北に傾くものとあり、正に東西に横はるものは少い。

a 東東北から西西南に三十度前後傾くもの 小七・

小八・寺二三・三六・三九・六〇・六一・六四・七〇

b 東東南から西西北に傾くもの 三五・六二

c 東から西に向ふもの 三七

二基の前方後圓墳も亦明に中軸線はaと同じく、土城址亦略、同方向を取つて居る。一般に古墳の方向が地形に支配されること特に瓢形墳に屢、見る所であるが、眞野臺地は寧ろ正東西に長くして眞野川の方向も關係がない。統計的には眞野の遺蹟は東を軸心として二十度乃至三十度を南に傾くといつてよく、永い年月に互りての營造にかくの如き一致を見るのはそこに意識的のものを感するのである。春分頃の東に對する觀念は寒地帯の人々に極めて強いものであり、磁石のない上代の特に北邊の人々の間に、東方がこの方向であると考へたものと推測しても謬ではあるまい。土城址が地形によらず古墳と同方向を取つたことを一應注目して置きたい。

副葬遺物も決して豊富ではなく、東北邊地の感をよく表はして居る。然し乍ら四九號墳の石製模造品は鏡・鎌・

槽・刀子の各種を含んで而かも製作良好で、八幡村高松等二三の例に見る小品に比較して堂々として居る。石製模造品が單なる伴葬用の模造といふよりも神靈を祭る爲めのものたることは、悉く小孔を穿つてあることから榊枝などに取りつけたものと考へられ、これを墓内に納めたもので必ずしも代用品ではない。たとへ古墳内から鏡の發見なくとも當時の人々の鏡を愛用したことは知られ畿内方面の上代文化、少くとも關東地方のそれに次ぐものを持つて居たことは肯定される。武器の内には直刀と刀子と矢鏃とが大半で、拵その他は明でないが、鍛刀の優れたものを佩び刀子を愛用し、弓矢は最も得意とする所であつたに違ひない。鐵鏃は(イ)長軸の柳葉形と(ロ)長軸の刀子形(ハ)平形無莖の三種があり、何れも畿内・關東にも見られるもののみであるが長大にして木幹の篋代を使用したことを特色とする。馬乗と弓矢とは上代以來關東以北の特技であつたとして差支ない。馬具としては轡・鏡板・雲珠・尾錠其他の辻金具・革金具が三例見られ、馬鐙のないのは専ら革鐙を用ゐたか。青銅の馬鐙三個は誇るに足るもので、三個が同じ鑄型によることを示すのはこの地方に於ける製作をも想像させる。只一例の玉類の發見によつて硬玉を除き各種の寶石を使用して居り、勾玉・管玉・棗玉・切子玉・丸玉・白玉・小玉の

一ト通りのものを持つて居たことが知られた。

以上を通觀して言ひ得ることは、眞野古墳の極めて小規模のもの、部分的調査によつても、これを遺した上代人の文化は畿内・關東のそれに通じて居り、中央に於ける様な華美にして豪華のものは持たなかつたにしても、質樸にして剛健の氣風と、武人の裝飾に裝身の心遣に、決して劣つて居なかつたことを確信出來るのである。田舎めいて居り地方的特色はあるにしても、文化そのものが中央と異なる點は更になく、同じ日本人の遺した上代文化であることを知つて満足すべきである。

これを何時の頃に置くかが残された最も重要な點であるが、關東以北の古墳に殆ど學術的調査を缺いて居る今日、單獨に時代を推定するは危險である。文化の傳播の一般性により、同じ形式は遠い地方に至るに従ひ實年代に於て遅れて居り、三十年五十年後に中央の遺風を地方に貴ぶ例を屢々經驗する所である。畿内より關東は遅く關東より東北邊境が文化に遅れ劣つて居ることは當然である。然し乍ら大正初期の一部の學者が考へて居た様に中央文化の東北に顯はれたのは蝦夷追討以後であり、奈良朝に初めて日本文化に浴したかの如き解釋は考へ直すべきである。天智天皇の頃に既に畿内になくなつた前方後圓墳も埴輪土偶も岩城・岩代を初め各地に見ることが

出來、比較的古い形式の直弧文を施した鹿角刀裝具も見出されて居る。仙臺市中には瓢形墳に所謂粘土櫛の好例が見られる。失はれた風習が蝦夷追討の頃に早く軍士によつて傳へられる筈がなく、もつと早くから徐々に北へ北へと傳へられたと考ふべきで、それを何時頃とするかは蝦夷そのものの性質の研究と共に検討を要する大きな問題である。

眞野古墳の示す文化の様式は武器・馬具・石製模造品から見て高塚時代の中期以後のもので、畿内の高塚後期と見ても大きな誤ではあるまい。僻遠の文化としては優れたものと考へてよく、百基に近い大小の古墳が三十年五十年の間に出來上つたとも思はれず、この地方が地方的の同族政治の中心であり文化の繁榮したことを考へしめるのである。

本概報の執筆に當つては主として慶應義塾大學文學部助手清水潤三・河北展生・同學生江坂輝彌・堀田穰・經濟學部學生山鹿太郎五君の忠實な調査記録并に實測圖によつたもので、調査に當つた學生諸君の助力と共に深く謝意を表する。若しそれ記述の誤りとか考察に關する點は執筆者の責任であつて前記諸君に累を及ぼすことを惧るるのである。